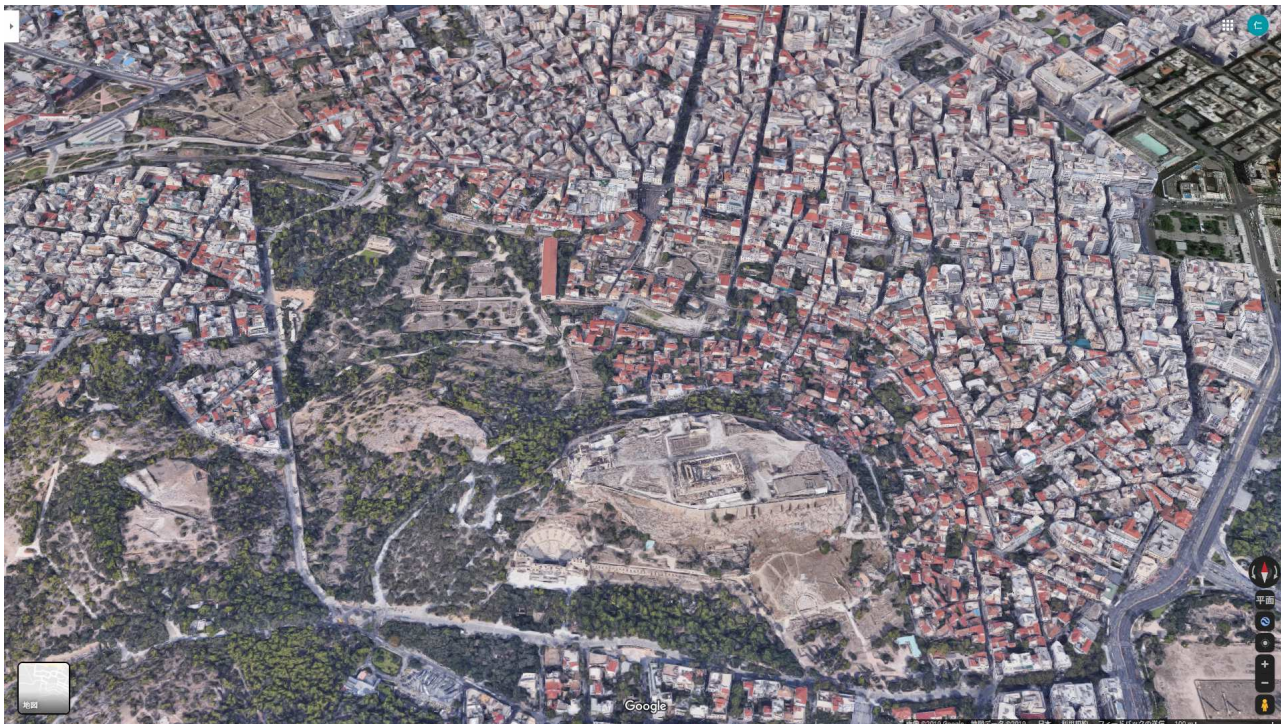


アテネ市 Athens ギリシア共和国 アッティカ州 人口 660,000 人



アテネ市中心部の鳥瞰 中央下の隆起している所がアクロポリス。左にアレオパゴス、さらに道を挟み、西に民会跡。

1990 年の夏 8 月、地中海沿岸を長期に渡り旅した。その始まりは、ギリシアだった。8 月 2 日には、ドイツのフランクフルト経由でアテネ入りしたが、そのまま船でクレタ島に向かいアテネで宿をとったのは、戻った 4 日の午後となった。歴史に名を遺すピレウス港に上陸し、地下鉄で都心のシンタグマ広場へ。そこから南へ、時折アクロポリスの丘を見上げながら、プラカと呼ぶ下町の坂を上る。見つけた安宿の部屋は、屋上のペントハウスだった。シャワーで汗を流し、空気が涼しくなった夕刻、アクロポリスの向こうのアレオパゴスの丘へと登った。丘は門があるわけでもなく、夜間でも立ち入ることができた。その代わり遊歩道は整備されておらず、ごつごつした岩場を歩くには夜間照明だけが頼りだった。東にはライトアップされたアクロポリスが神々しく聳え、見下ろす北側には、古代アゴラの向こうに現代の市街地が広がっていた。

この時の事を真っ先に思い出すのは、旅の

最中とにかく暑くて大変だったから。それに反してアレオパゴスの丘では、日中の日差しもなく涼しく乾いた風が吹いていた。何と快適な、肌に心地よい風だったこと！旅ではペットボトルの水が手放せなかったが、その水で喉を潤すと何とも言えぬ快感が広がった。

アレオパゴスとは、古代ギリシアのポリス(都市国家)にあった貴族による評議会の跡だとか。しかし現在は、往時の建物が残らず跡形もない様。この周辺は古代ギリシアの遺跡だらけで、道を挟んだ西側には古代民主政治の聖地と言えるプニクス(民会場)の跡も見ることができた。

アクロポリスの丘へ

さて翌日は、早起きしてアクロポリスの丘へと登った。西側の門前で待つと、夜通しこの丘を守った警備の衛兵が古風な制服をまとい、つま先に飾りを着けた靴を蹴り上げるように行進して降りて来た。丁度開門の時刻だ。一斉に動き出した観光客とともに、プロピュ

ライアと呼ぶ、後のローマ時代に造られた前門跡をめざし登る。そこまで登ると、アクロ



夜の警備を終え、衛兵がアクロポリスの外へと降りる

ポリスの丘は平坦となり、遠目にその象徴「パルテノン神殿」が見えて来た。その手前左手に、エレクトェウス神殿(エレクトェイオン)が迫る。アクロポリスの殆どの施設は破壊されるか一部崩れ落ちている様だが、この小ぶりの建物は、保存が良い方だ。中でも南側に突出したカリュアーティディスと呼ばれる少女像の柱廊は、その屋根を少女の頭が支える構造で、美しい造作だった。前面四本の柱の中一本はレプリカとのこと。レプリカによって補うのは、世界遺産級の文化財が豊富なギリシアでは、当たり前な手段だそうだ。

肝心のパルテノン神殿は、中にクレーン車を配置し、あいにく工事中だった。ドーリア式の列柱により二重に取り囲まれた神殿は、縦 80m 横 160m と東西に細長い建物で、中にはアテネの守護神、アテナ女神が祀られていたという。古代ギリシアの盛時と言える紀元前 5 世紀中頃、民主政治の指導者ペリクレスがその指揮を執り、アテネ市民各界の協力を得て 9 年の歳月を経て完成させたと言う。その壮麗で美しい切妻の造形は、工事用フェンスの外側からでも十分眺めることができた。

さて、この丘から出土した彫像や工芸品は、すぐ隣のアクロポリス博物館に収蔵されていた。※1 玄関には昔も今もアテネのマスコットである「知恵の梟」像が置かれていた。収

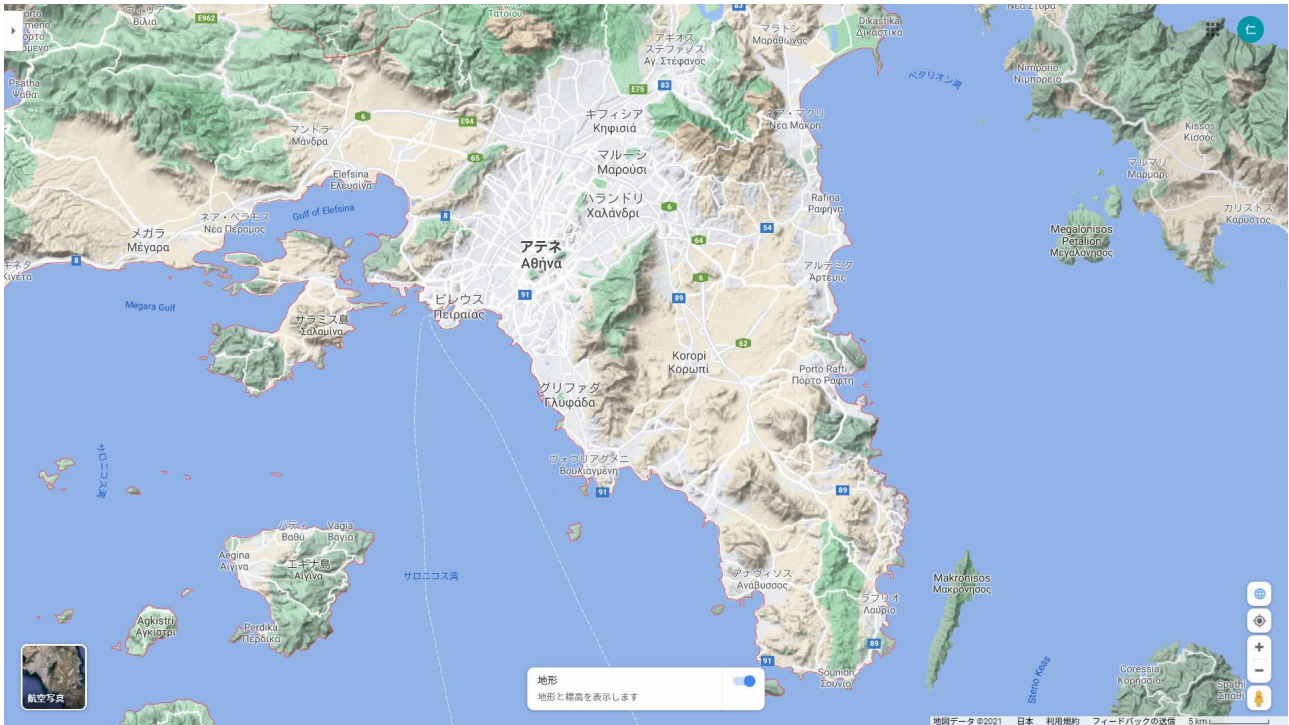
蔵作品で目立つのは、前 7 世紀から 6 世紀にかけての「アルカイック期」に造られたコレ像。若い娘が薄い衣をまとう立像だ。どれもこれも顔の表情には硬さが残るが、なぜか口元には微笑を湛えている。「アルカイック期」はそれまでの様式に縛られた造形に、人間の自然な表情を加味する試みが行われた時代で、ポリス社会の盛時となる次の古典期を準備する移行の時期だった。それがこの不思議な微笑(アルカイック・スマイル)に表れている。パルテノン神殿の見事な破風を飾っていただろう彫刻類もあったが、いずれも断片で、こうしたコレクションを見たいならば、ロンドンの大英博物館に行く方が良いのではと、後から知った。

外に出ると、アクロポリスの北東の隅に一段高くなった展望台が見えた。人だかりのするそのテラスに上がると、北東方向に広がる現代のアテネ市街が一望の下になった。直ぐ下にはプラカの街並み。自分の泊まっている宿も見えた。近くで盛んに「ジャポネーゼ！」と騒ぐ一団がいた。振り返ると家族旅行でこの地に来たイタリア人だった。私の様な東洋の訪問者を物珍しくでも思ったのか、何か好奇心な目でしかも親しげだ。陽気な父親が、子供たちに私のことをからかうように言っているらしい。しかしイタリア語が分かるはずもなく、こちらアルカイック・スマイルで応じるしかなかった。

アクロポリスの南麓には、ディオニソス劇場とイロド・アッティコス音楽堂の二つの半円形の野外施設の跡が残っていた。上から見下ろすと音楽堂には仮設の舞台等が作られていて、夏のこの時期演じられるという野外劇の会場となっていた。

スーニオ岬へ行ったものの

太陽が高く昇って来て、日差しが一段と強くなったので、アクロポリスを後にした。プ



アテネとその周辺アッティカの地図

中央右上にマラトン、南端にスーニオ岬。

ラカの宿に戻り、近くのレストランの店前に置かれたテーブルで、昼食をとった。メニューはこの地で一般的なキリル文字で書かれ、何が出てくるのかと恐る恐る料理を待ったが、何故か日本のちまきに似たブドウの葉に包まれたライスで、面白いものを食べたという感想を持った※2。午後の暑さを避け、宿に帰ってシエスタとなった。ひと眠りした所で、屋上を徘徊する家猫の声に起こされ、今度は都心からアッティカ半島南東端のスーニオ岬を目ざし、都心からバスで出かけた。



スーニオ岬のポセイドン神殿跡とエーゲ海

そのバス旅は思った以上に時間がかかり、着いた頃には夕陽がエーゲ海に沈むところで、

多くの観光客がこの地の名所ポセイドン神殿から出てくるところだった。入場門はすでに閉じられていた。仕方ない。隣接する北側の入り江を望む展望台へと向かう。そこからは、エーゲ海に今まさに沈まんとする紅色の夕陽が望まれた。これを見ただけでも、満足だった。

帰り道で、ドイツ人だと言う青年二人と出くわす。アテネから殆ど歩きでこちらまで来たと言う。何でも統一直後のドイツ東部の出身とかで、金はないが自由を得たので、思い切って旅行して来たとのこと。思わず「フライハイ(自由の意)」と叫んでしまった。彼らと別れ、帰りのバスに乗る。夜の帳りが降り、車窓の風景は良く分からなかったが、道は往きの海沿いでなく山側の道に行く。そこにラブリオの看板も見かけた。2500年前、この地から出土した銀が、古代ポリスのアテネを潤していたと言われている。

博物館とマラトンと

翌朝、プラカを下って都心の北側へと歩く。徒歩で行くにはやや遠かったが、行く手に国

立考古博物館の古典的な外観の建物が見えて来た。入場して、ミケーネ時代のコレクションの部屋を目指す。何しろ黄金色なのですぐにわかった。先ギリシア時代のミケーネ文明を象徴するアガメムノーン王のデスマスクのことだ※3。死者の相貌の特徴を刻んだもので、なかなか描写力のある人が製作したのでは、と思われた。ただし意外なほどに小ぶりで、その点は気抜けしてしまった。

さて昼から午後にかけてアテネの東側へとバスで向かった。1時間弱で、アッティカ半島東側の海沿い、マラトナスの集落の手前で降りた。そこから東へと平坦な道を行く。数分で目的のマラトンの古戦場に達した。目立つ看板等はなかったが、フェンスに囲まれた広い敷地に高さ10m近い塚が見えた。それが、古代ギリシア最大の決戦とも言えるマラトンの戦いの印、戦場で倒れた戦士の墓だった。

入口にたどり着きいざ入場をと思ったら、無情にも開場時間が過ぎており、敷地内へは入れなかった。まだ2時半だと言うのに…。そこで、そのまま東へと進み、海沿いの海水浴場に達した。沿岸に都市も少ないこちら側のエーゲ海は、水底まで透き通った水で美しかった。

紀元前490年の夏の終わり、ギリシアに侵攻したペルシア王ダレイオス1世の軍隊2万は、ここに上陸布陣した。迎え撃ったアテネの軍は、プラタイアの同盟軍とあわせ約1万。主戦論のアテネの将軍ミルティアデスは、スパルタの援軍を待たず総攻撃を仕掛けた。果敢にペルシアを攻め白兵戦に持ち込んで、アテネの重装歩兵密集部隊を存分に活躍させた。その勢いに押されて、ペルシア軍は総退却。沖の軍船に飛び乗ってギリシアを後にした。終わってみれば、ペルシア側の犠牲6500に対し、ポリス側の犠牲は200。※4

この勝利を見て、ミルティアデスは兵士

に命じて、留守を預かるアテネに勝利を知らせよう走らせた。その道は山を迂回して来たバス道路ではなく、山の鞍部を越える近道だったようだが、この故事を記念して現代のオリンピック競技でマラソンが行われるようになった。確かにマラトンの綴りはローマ字だとMarathonとなり、英語ではthonはソンと発音することになる。マラトンの平野からは、西方にその兵士が走り登ったと思われる山が横たわっているのが見えた。



マラトンの戦士の墓と山並み

プニクスとアゴラと

さて四日目は、あらためて都心の名所・旧跡を訪ねた。アクロポリスの丘から眺めたプニクス(民会場)の跡は白い岩と砂礫に覆われていた。そこへは例のアレオパゴスの丘をかわしてたどり着く。この時期、アテネの空はいつも真っ青だが、午前中から焼き付ける陽を浴びて、この地は眩しく光っていた。

プニクスの丘は半円形に削れており、その中心に長方形の台座が今も残っていた。紀元前5世紀中頃、先のペルシアとの戦いに勝利したアテネでは、古代民主政治が成熟し、市民権を持つ者にはポリスの総会である民会への参加が認められるようになった。ただしそこには、女性の姿はなかったが……。

観光コースに入っていないのか、人っ子一人いないその場の演壇に立って思ったのは、ここでポリスの指導者ペリクレスが市民に雄

弁を振るったこと。そして身内のスキャンダルを言い立てられた時、半泣きで弁明を述べたこと。そうした人間臭いやりとりが、2500年前ここで行われたことに思いをはせた。演壇を囲むように、市民が演説を振るう弁士を眺めていたはずだ。そして今、ここにはプラスチック製の椅子が並べられている。脇の看板を見ると、昼間はともかく夜には大勢の人がやって来て、夜空に照らされた光と音のショーを楽しむ場になっていた。

思い出すのは高校時代、生徒会の役員選挙で書記に選ばれた時、どこまで本位かは分からなかったが、とにかく生徒総会を成功させるのに奔走したこと。時代は学園紛争後のしらけた雰囲気漂い、政治にも民主主義にも無関心な生徒が多かった。そもそもそんなことに積極的な意識の高い生徒がいるかも怪しかった。おかげで、体育館を埋めた大方の生徒は進行そっちのけで、配られた資料を紙飛行機に折って飛ばしたりする始末だった。

当時の日本青年の意識調査では、社会を積極的に良くして行こうと考える青年は2割にも満たず、そうしたことに関わることがダサいとされていた中で、自分も諦めに近い気持ちを抱いたものだ。公(おおよけ)のことを考えるのは、しんどいと。

ところが、ギリシア旅行の案内所に興味深いことが書いてあった。せっかく政治に参加する権利を獲得した市民たちでさえ、ほぼ毎週開催される民会への参加に、積極的とは言えなかったと言うのだ。民会の成立には最低5000人の参加が要件だった。開催当日この丘上に登ろうとする市民の足は鈍かった。そこで主催者はある時から、麓のアゴラに滞留する市民を会場へと向かわせるため、係に赤い泥のついた長い縄をもたせ、追い込み漁でもするかのように、ゆっくりと丘上へと誘導したと言うのだ。

私は、古代のアテネを民主政治の手本のようと思って来た。しかし、このポリス市民でさえ、政治にしんどさを感じていたのだと知ると、何か背負っていたものを降ろして良いように感じたものだ。人間は、直接利害関係にないことまで想像力を膨らませるのは難しいのかもしれない。それでは、公の社会は済まないとしても・・・。



プニクスの演壇

プニクスで思いにふけった後、丘を降りて古代アテネの市民生活の中心、アゴラへと向かう。しかし、何かの手違いか案内書には月曜も開場とあるのに、入口のフェンスが閉じられていた。こちらの中には入れずじまい。当時、男性市民は、ストアと呼ばれる列柱の並ぶ建物に日差しを避け、日長一日談笑したり、買い物をしていたと言う。そのストアの建物等が復元され目の前にあるのに、本当に残念だった。いつか別の機会に訪れてみようと思う。

このギリシアの旅の後半。ペロポネソス半島の遺跡オリンピアを訪ねたのだが、その博物館に興味深いイラストが展示してあった。それはこのアテネのアゴラの最上部にあったという泉で、壁に動物の口型を並べそれを吐水口として水が勢いよく出る様を示したものだ。夏場の半年間水に乏しいこの土地で、飲み水の確保は常に課題だった。そん

な中、アテネに関して言えば、アゴラの泉は多くの人口(最盛期に20万を超えた)を維持するのに役立ったはずだ。

この日は明日からのペロポネソス行きに備えて、宿に早く帰ってくつろいだことを覚えている。

了

※1 アクロポリス博物館は、2009年以降その南東の麓に移転し、展示内容を充実させている。

※2 料理としては前菜に当たるもので、ドルマーデスという名だった。

※3 最近ではアガメムノーン王より前の時代のものだと言われている。

※4 戦いは、ペルシア軍が海を背にして戦ったとされるが、塩野七生氏の『ギリシア人の物語』では、ペルシア軍は左に海を見て、南側に布陣したボリス側と対峙したとなっている。もう少し調べてみたいと思う。